

# Physical Arts No.10

Society for Studies of Physical Arts

身体運動文化学会

会報 第10号

●平成13年10月31日●

編集発行

身体運動文化学会

会長 高橋 進

## 節目を迎えて

身体運動文化学会

常任理事 菊本 智之

1996年11月4日、筑波大学において発足会が執り行われスタートした当学会も5年の月日を積み重ねてまいりました。そして、その間には国際シンポジウムを含む5回（今年度で6回目）の学会大会、学術誌の発行、複数の出版物、本号を含む10号までの会報の発行などを通して研究・教育活動を行ってきました。その内容の多くは、他の学会と比しても決して遜色ない画期的な試みであり、また、それを一つ一つ実現するために会員一丸となって格闘して参りました。一見順調に発展を続けてきたかに見えるその陰には、会員各位のご苦勞とそれをもとめない強烈なバイタリティがあったように思われます。



このような意味で、当学会の草創期は、具体的な目標に向かって邁進してきたといえるでしょう。しかし、21世紀を迎え、当学会も節目の5年間を経て、これから発展期、充実期に向け一層のエネルギーを注いでいかなければならない現在、不安定な社会状況、世界的な不況、少子化に伴う大学・短大の環境の変化などが手伝ってか、今ひとつ当学会の活力が失われているかのような感があります。会報の第1号の学会設立趣旨にも述べられていますが、「様々なジャンルの研究者が集い、討論を重ねる」ことによって、それまでの固定観念を棄て、有機的に関連づけられた真の意味での学際的研究を実現することを当学会では目指しているのであり、学会活動のこの部分を活性化していかなければ、我々が目指している新たな学問体系構築の突破口は開けないと思います。会員以外の新たな人々との交流や討論も新たな視点を与えてくれるものと思います。人間性の危機が叫ばれているこの時代だからこそ、また、幅広い領域を研究対象とする当学会だからこそなし得る活動内容があるはずであり、そこに存在理由を求めていくことも当学会のひとつの在り方ではないかと思われます。

大変厳しい時代ではあり、言うは易く行うは難しではありますが、学会の諸活動や企画をその場で消化していくのではなく、それぞれの成果を研究や教育に生かし工夫していくことが、当学会の新たな可能性を開き、創造的で活力のある学会活動に繋がっていくと思います。学会のひとつの節目を迎えるにあたり、私見であり甚だ偏った見方であったかもしれませんが、一層充実した学会を会員各位とともに考えていくために、提言させていただきました。

菊本 智之（きくもと ともゆき） 昭和39年東京都に生まれる。筑波大学体育専門学群卒業。同大学院修士課程体育方法学専攻修了。現在、浜松大学国際経済学部助教授。

## 地域コミュニティにおけるスポーツ団体の現状と課題

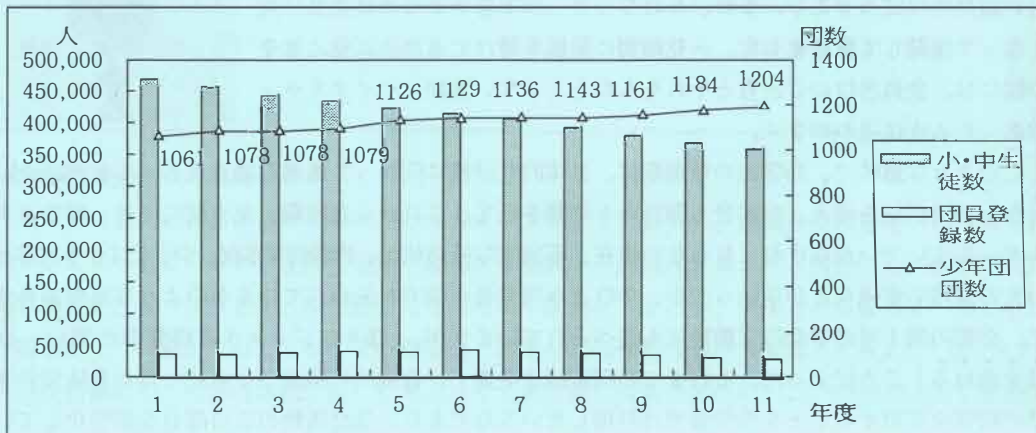
～子どもを育む地域コミュニティの確立を目指して～

(社)浜松青年会議所

第41期理事長 鈴木 昭典

21世紀は、知が富を生む時代と云われている。今後、教育と生涯学習社会を一層重視する時代を迎えると予測されるが、日本では近年、子ども達自身に学ぼう、求めようとする意欲が薄れているという声が聞かれる。この背景には、①社会全体に漂う目的喪失感、「勉強しなくても何とかなる」「何のために勉強をやっているかわからない」など、学ぶことへの目的意識が見失われがちになっていること、②こうした状況が、真面目に勉強したり努力したりすることの意義を軽視する風潮を生み出していることなど、様々な要因が指摘されている。このような中、子ども達が健全に成長していくためには、学校で計画的、組織的に学習する一方、地域コミュニティの中で様々な人と交流し、生活体験、自然体験を豊富に重ねることが大切であろう。また、親の子育てに対する不安や負担感を軽減させるための地域子育て支援機能の一層の整備も必要である。

### 小・中学生の生徒数とスポーツ少年団登録団員数及び団数



地域コミュニティを基盤とする団体のうち、スポーツ少年団の団員数は、少子化の傾向もあり、やや減少しているものの、団体数は逆に増加している。

これらに参加する子どもの多くが「上手くなること」「友だちと一緒に過ごすこと」「試合に出て勝つこと」を期待して参加している。練習や試合を通して技術的に向上することや試合に出場して勝つことは、スポーツを楽しむ上で非常に大切な要素であるし、自己実現という観点からみても重要である。また、遊びの個別化が指摘される現在、友だちと過ごす時間は、子どもにとっても大変貴重な時間である。しかし、例えばスポーツ少年団の活動のほとんどは大人（指導者や親）によって管理・運営されており、そこには大人の期待や価値観が反映されることも多いなど課題も残されている。礼儀を身につけることや協調性を身につけることなど、いわゆる教育的機能をもつ反面、もっぱら技術的指導に重点が置かれたり、勝利至上主義に陥ったりするなど、子どもの健全育成に却って逆効果を及ぼしかねない点なども懸念されている。その他、種々の競技においてますますクラブチーム化の傾向が強まる中、スポーツ少年団では①子どもに過重となる早期教育優先の考え方



の見直しと子どもの健全な心身の発達に応じた指導体系の確立及び研究機関の設立、②会員数の適正化を図るための組織などの見直し、③地域コミュニティに埋もれている人材の発掘と子どもへの魅力あるプログラムの提供、④中、高校生になっても活動できる環境の整備とリーダー、指導者として人材育成、⑤親、世話人主導の活動から子どもの自主的な活動への移行、⑥子ども達の興味関心に応じた地域の活動への積極的な参加、などの課題に取り組んでいく必要がある。

この他の団体として、特定非営利活動推進法（NPO法）が平成10年12月1日に施行されたことをうけて、「子育て支援」や「子ども健全育成」を目的に掲げる団体が活動を始めている。浜松市内では、平成13年5月に青少年の健全育成や生涯スポーツの振興を目的とした異色クラブが誕生している。その団体は、平成14年度から実施される学校5日制を見据え、地域のPTAや教師など教育関係者有志が中心となって運営する団体であり、勝ち負けはこだわらず、対外試合も入会金も月々の会費もないというユニークなスポーツクラブである。指導者はすべてボランティアで運営費は企業や篤志家の寄付で賄うという誠意に喜ばしいものである。大人主体の経験に依存することなく、専任講師や専門家の助言などを得て、子ども達の健やかな育成に寄与する団体として運営されることを期待したい。地域にこのような団体を定着させていくためには、①NPO法人活動が地域住民に幅広く理解され利用しやすいような情報提供システムの充実、②公民館、学校など地域の公共施設の整備（法人の会議や打ち合わせの場、活動の拠点として）、③専門家による学習機会や研究情報の提供、相談体制の充実、④団体などの責任の所在と危機管理体制の確立、などの課題が残されているだろう。

ところで、昨今、子ども達の健やかな成長には「地域」の役割が欠かせないことが強調されているが、かつて、地域コミュニティには、自然環境や遊び場を始め、子ども同士、親同士、子どもと大人といった様々な人間関係や、さらには、その地域固有の伝統や文化などの生活様式が備わっていた。これらは、子どもの社会性を育成し、子どもの健やかな成長と発達に重要な役割を果たしてきた。しかし、その地域コミュニティも都市化や少子化の影響を受けて激しく変化し、様々な体験の機会を日常的に得ることができるような時代ではなくなってきている。このような時代において、子どもの成長、発達に必要な環境を維持していくためには「意図的」「計画的」に多様な体験的プログラムを提供し、心豊かにたくましく生きる子どもを育む環境の整備が求められている。このようなことから、社会の変容、子どもの変容などの実態を踏まえた上で、次代を担う子どもの育成は社会全体の責務であるという観点に立って、地域が一体となって子どもを育む環境づくりとして、新たな「子どもを育む地域コミュニティ」づくりが必要である。

その基本方向は①家庭の教育機能の回復・向上を中心に据え、家庭教育を社会的に支援するネットワークで結ばれた地域づくり、②地域コミュニティに住む人々の自発的、主体的な活動意欲に支えられた地域づくり、③自分たちの生活する場で生きる子ども達を、共に守り育てていくことを地域コミュニティの構成員である住民一人一人が共通の課題とした地域づくり、④従来の地縁的な結びつきによる地域だけではなく、同じ目的や興味関心によって結びついた、いわゆる目的志向的な団体、サークルを核としたテーマコミュニティの形成、などである。そして、子どもを育むための目的・目標を達成するためには、地域の子どもの地域で育てるという観点に立って、新たな「地域コミュニティ」づくりを推進することが必要である。

子どもの健全育成を推進する上で、地域コミュニティに期待される役割は大きい。各地域コミュニティの取り組みは、徐々に成果をあげており、評価されるべきものが多い。しかしながら、子どもを育む環境として必要な機能を全体として見たときに、地域コミュニティにおいて、それらがシステムとして整備され、機能されていないのが現状である。各団体・組織の特性を生かした取り組みを一層推進すると共に、ネットワーク化を図りながら地域コミュニティにおける子育て機能の総合的なシステムを構築していく必要がある。

## 地域社会に密着した大学クラブ作りについて

～ 浜松大学バスケットボール部の活動から ～

浜松大学バスケットボール部監督

木宮 敬信

浜松大学バスケットボール部は平成7年に創部し、地方からの初の日本一を目指して活動しております。本年度は、西日本大会で3位に入賞することができ徐々に成果があがってきたものと実感しております。今回は、我々が強いチームを作るポイントとして、特に重視している地域密着プログラムについてご紹介したいと思います。

試合に勝つためのポイントは多々ありますが、優秀な選手を獲得するリクルート活動はその大きなウェイトを占めるものです。選手の能力に大きな差があれば、それを埋めることは容易ではありません。そして、このリクルート活動において、我々地方の小規模大学は大きなハンディを負っています。特に、現代は少子化による大学全入時代に突入したと言われ、第1志望の大学に合格できる可能性が高くなりました。地方大学にとっては厳しい時代と言えます。そのような中で、地方小規模大学が優秀な選手を獲得するためには、地方ならではの有意点を出していくべきです。関東や関西地区など大学の数が多い地域においては、大学と地域との関わりが多様化するため密接な関係を築くことは非常に困難です。地域と密接な関わりを持つことができれば、選手育成プログラムによって地元で優秀な選手を育て獲得することができます。また、他地域の選手にとっても、他大学との差別化が図れるため、魅力の1つになると考えております。その他のメリットとしては、地元への就職活動に役立つことや地学連携の中で一般学生の獲得にもつながること等が予想できます。また、地域にとってのメリットは、大学の持っている指導力やスポーツ施設等を有効に利用することができることや、プロチームや社会人の強豪チームがない地域にとっては、スポーツ活動のトップに位置し、多くの選手の目標となり競技力向上に役立てることができる点であると考えられます。特に、少子化により学校が新規採用を控える中、中高の指導者不足は深刻な状況であり、地域でのスポーツ振興を促すためには母体となるチームの存在が必要不可欠となっています。既に、サッカー等では、地域を取り込んだクラブチーム運営を学校のクラブ活動と両立させる例が多くあります。このような趣旨により、現在我々が取り組んでいる地域密着プログラムをご紹介します。

地域との関係作りにおいて、我々はボランティアとして地域貢献を考えるのではなく、自分たちの目的達成の為にお互いにメリットのある形で地域貢献を考えております。その柱となるP&Cプログラム（Parent&Child Program）においては、多くの方々にバスケットボールを楽しむ機会を提供しようと、地域のお祭りやイベント等において、フリースロー大会や3 on 3大会を開催したりエキシビジョンマッチを開催し、トップレベルの試合を身近に観戦する機会を作っています。また、はじめてバスケットボールに触れる子どもたち対象のクリニック、サマーキャンプ、バスケットボールに英語やインターネットといった付加価値をつけたクリニック等を開催しています。現代の子どもたちが抱えている多くの問題は、家族間のコミュニケーションの欠如がその原因の1つと考えられております。このプログラムが、良い家族関係を築ききっかけとなることを期待しています。



さらに、地域の競技力向上のためのプログラムとして、Bチームが毎週2回、地元の高校チームを順番に廻って合同練習を行ったり、スタッフによる継続的な練習指導クリニックを行っています。また、地元の高校生を集めたカップ戦（ランブラーズカップ）も開催しています。このようなプログラムを通じて感じることは、選手、指導者ともにトップレベルのバスケットボールに触れる機会を強く求めていること、また、大学がリーダーシップをとって地域全体のバスケットボールの普及に努める必要があるという点です。

大学におけるクラブ活動の位置付けは、大学改革の波を受け、今後転換期を迎えることになることが予測できます。これからの大学は、地域と共存していくことが最重要課題の1つになります。クラブ活動も同様に、自分のチームだけではなく広く外に目を向けた活動を考えることが必要になるのではないのでしょうか。今回ご紹介した我々の取り組みは、大学クラブ活動の1つのモデルケースです。これから、更に理想的なクラブ運営の方法を考えながら、新たなプログラムを導入していきたいと考えております。

## スポーツに良い環境を ～治療室の現場から思うこと～

メジャーアスレティックトレーナーズやま鍼灸・整骨院院長

浜松医療学院 理事・教員 山下 典秀

本治療院では通常の治療スペースの他に専用のアスレティックジムを設け、スポーツを安全に行い、競技力向上の為、スポーツトレーナーをもっと身近な存在にすることが必要だと痛感し、取り組んでいます。患者さんのケアandケアの毎日、今回は「スポーツトレーナーについて」治療室の現場から一言。

プロサッカーチームの発足や、健全な青少年のスポーツ活動が隆盛を極め、取り巻く環境も充実し、科学的な知識の目覚ましい発達や普及といった時代背景を受け、柔道整復や鍼・灸・マッサージ・リハビリ等の技術がスポーツトレーナーの世界で大きく注目を集め、それを目指す若者が増えています。監督・コーチ・スポーツに携わる方々は、バランスのとれたスポーツ観や技術のコーチングを担当され、トレーナーは心と体のケアを担当します。選手一人一人の能力や体調に合わせたトレーニングメニューの作成や、試合時のケガに対しての応急処置や治療、日常のリハビリや体調管理など、スポーツ医学の立場で選手をサポートするのがトレーナーの仕事です。スポーツにはケガが付き物。緊急時のすばやい対応と適切な処理によって、症状を最小限に抑えることができます。

2000年のシドニーオリンピック・トランポリン競技の公認トレーナーとして、檜舞台体験する機会に恵まれ、また本年度、アテネオリンピックに向けて、オリンピック委員会からトレーナーとして委託をうけました。野球・バスケット・サッカー・陸上・バレーボール・トランポリン・スキー・水泳・格闘技等々、それぞれルールも違えば運動の仕方やケガも異なる中、日々たゆまぬ自己研鑽をさせて頂いています。スポーツを安全に行い、競技力向上の為、スポーツトレーナーをもっと身近な存在にして下さい！

ケガを克服した選手がトレーニングを積んで、試合で良い結果を残してくれた時が一番うれしいですね。そして、後継者の育成と、良い環境づくりに貢献したいですね。

# 第6回身体運動文化学会

日時：平成13年11月18日(日) 9:20~16:40  
会場：東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校

## 一般研究発表

口頭発表 (9:30~11:30)  
ポスター発表 (12:30~13:15)

## 公開授業 (13:30~14:15)

小学3年生による器械運動  
内田雄三(東学大附属世田谷小学校)

## シンポジウム (14:30~16:30)

『子どもの身体運動 — ぎこちない動きを探る —』

司会：小原 晃(目白大学)，原 英喜(國學院大學)

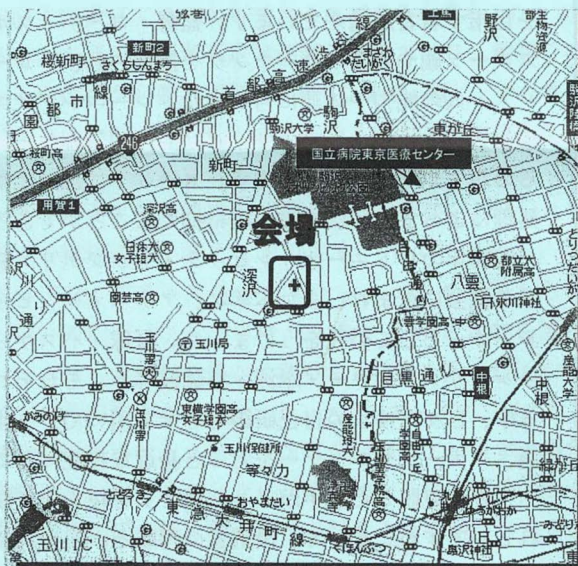
学校教育から	藤井喜一 (東京学芸大学附属世田谷小学校)
社会体育から	大貫映子 (スポーツレジャーアドバイザー)
健康教育から	嶋崎博嗣 (白鷗女子短大)
小児科医の目から	笠原悦夫 (JR東日本中央保健管理所)

## 交通

自由が丘駅からバス10分  
(自01 駒沢深澤キャンパス前ゆき)  
東深沢小学校下車、徒歩3分  
用賀駅からバス15分 (恵32 恵比寿ゆき)  
学芸附属中学校下車、徒歩3分  
渋谷駅からバス20分 (渋82 等々力ゆき)  
深沢不動下車、徒歩15分

## 問合わせ

学芸大学教育学部附属世田谷小学校  
Tel:03-5706-2131  
事務局電話 090-3877-3669  
E-mail: hhara@kokugakuin.ac.jp





## 2001年 身体運動文化学会 第6回大会 ご案内

実行委員長 藤井 喜一

(東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校)

猛暑で始まった今年の夏、各地で様々な出来事があったと思いますが、会員の皆様には如何お過ごしでいらっしゃいますか？ 昨年の第5回大会は、神戸学院大学の絶大なるご支援をいただき、また実行委員会のご苦勞の賜で国際シンポジウムとして多大なる成果をあげられたことに敬意を表す次第です。

今年度の大会は、東京に会場を移して開催することとなりました。本年もスポーツ界は、福岡での世界水泳やカナダでの世界陸上、秋田でのワールドゲームズなどを初めとして、昨年のオリンピックと来年のサッカーワールドカップや冬のオリンピックの狭間とはいえ、多くの大会やイベントが日本国中を賑やかに駆けめぐっております。一方では、華やかなイベント的な大会とは対照的に、地道な活動を続けながら生活の中に溶け込んだ身体活動も決して少なくないことと思います。このような事柄を、学際的に大きな観点から見ようとするこの学会の趣旨に添うよう、種々の分野からの研究発表や意見交換をしたいと思い、今年度は、ポスター発表に十分な時間を設定いたしました。少しでも多くの会員の方々への参加をお待ちしております。

シンポジウムについては、子どもの身体文化に焦点を当てることといたしました。高齢者や中高年者の健康な生活のために身体活動の果たす役割は大きいのですが、次の世代を担う子ども達の身体活動の大切さも、今声を大にして訴えなければならぬような気がして、3年前からプロジェクトを組ませていただき、子どもと直に接している目からみた、子どもの時代的な変化を捉えようとして参りました。特に、例年の基調講演に替えて、小学生の公開授業を、是非、多くの会員の方々にも見ていただきたいと思い企画に取り入れれました。研究授業ではなく、公開授業として、この学会員ならではの視点から、参加していただきたいと思っております。

### テーマ 子どもは変わったのか？ — 子どもたちの変化を読みとれば —

プログラム	9時20分	開 会
	12時30分～13時15分	研究発表（ポスター発表）
	13時30分～14時15分	公開授業（小学3年生による器械運動） 内田 雄三（東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校）
	14時30分～16時30分	シンポジウム テーマ「子どもの身体運動 …ぎこちない動きを探る…」

後 援：東京都教育委員会

### 《事務局便り》

会員数の増大が、そのまま学会の発展につながるわけではありませんが、140名余りの会員数もその後あまり変化が見られず、会費の納入状況などとの関係から、今後、学会事業全体の総合的な見直しも必要となってまいりました。諸処の停滞は学会活動に支障をきたすことも懸念されます。会員同士の連携を強め、学会の一層の充実を図って参りたいと思いますので、皆様の御協力、ご尽力を切にお願い致します。

会員名簿の整備は、円滑な学会活動にとって不可欠なものです。随時更新してまいりますので、変更のあった方は、至急事務局までご連絡ください。電話・FAX・e-mailいずれの方法でも結構です。宜しくお願い致します。最新版の名簿も制作中です。

事務局 TEL : 078-974-2351

FAX : 078-974-5689

e-mail : maebayas@human.kobegakuin.ac.jp

### 《会費納入のお願い》

当学会の活動は、会員の皆様の会費によって成り立っています。昨今、会費未納の方の割合が増え、会員数が横這いの状況の中で、今後の学会活動に支障をきたしたり、会費の見直しを検討しなくてはならない状況を生みだしかねません。未納の方は是非納入していただきますよう重ねてお願い申し上げます。納入方法についてのお問い合わせは、学会事務局までお願いします。

### 《会報委員会からのお願い》

いつも御協力いただきましてありがとうございます。これまでも、会員各位に会報への投稿をお願いしてまいりましたが、企画の提案や提言、ご批判・ご意見などほとんど情報のない状況の中で、編集作業を行っております。少し強引な方法で申し訳ありませんが、名簿などを使って、会員全員に順番制でご投稿いただくことを常任理事会、理事会に会報委員会から提案してみようと思います。自由投稿欄とし、内容は気軽に難しく考えなくても気軽に投稿できるようなコーナーにしたいと思っております。その節はどうぞ宜しくお願いいたします。

### 編集後記

前回の第9号で、今後このように発行の遅れるようなことがないように充分気をつけると宣言しながら、それ以上に予定の時期を過ぎてしまいました。偏に担当者の不徳の致す所です。お詫び申し上げます。

今回はテーマの設定が難しく特に設定いたしませんでしたが、お二人の方が「地域コミュニティとクラブの課題」という共通テーマで執筆してくださいました。浜松市の鈴木昭典氏は会員ではありませんが、当学会に興味を示していただいております。快くご執筆してくださいました。この場を借りて御礼申し上げます。

(菊本智之 記)

PHYSICAL ARTS No.10  
(身体運動文化学会 会報第10号)  
平成13年10月31日  
Society for Studies of Physical Arts  
身体運動文化学会  
会長 高橋 進

【事務局】〒651-2180  
神戸市西区伊川谷町有瀬518  
神戸学院大学人文学部前林研究室気付  
Tel (078)974-2351